



TITLE:

平成7年度学術情報センター・セミナー参加報告

AUTHOR(S):

忽那, 一代

CITATION:

忽那, 一代. 平成7年度学術情報センター・セミナー参加報告. 静脩 1996, 33(1): 9-10

ISSUE DATE:

1996-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37433>

RIGHT:

common/cdrom.html)、主題分野毎に各図書館でサービスされています。

オンラインで提供されているデータベースとしては、MEDLINE、Avery Index to Architectural Periodicals、Elsevier Materials Science Journalsがあり、ATHENAのワークステーションから利用できるように、Willowと呼ばれるインタフェースが作成・提供・頒布されており環境が整備されています。

2-6. MITの印象

これまでに書き連ねてきた印象を記して、MITの図書館情報サービス・システムの見学記のまとめとします。

第1は、サービスやシステムがコミュニティのものであるという点です。

第2は、ネットワークが有効に働いているという点です。

第3は、構成員に平等に提供できるサービスでありシステムであるという点です。

(参考文献)

1. Guide to MIT Libraries など
 2. Access Technology for Information and Computing at MIT
 3. MIT Bulletin, Graduate School Manual, Facts, Practical Planning Guide など
- @これらの文献は著者の手元にあります。
(続く、次回はUCLAの予定です。)

平成7年度 学術情報センター・セミナー参加報告

附属図書館洋書目録情報掛 忽那 一代

「こんな研修があるけれども、行ってみないか。」専門員から標記の研修についてお話を戴いたのが、暑い夏の盛りの頃でした。期間の長さ・密度の濃いカリキュラムに圧倒され、UNIXの使用経験もない我が身を振り返るほどに募りゆく不安で頭の中が一杯になった頃、研修決定通知が届き、暗澹たる思いで東京へと旅立つことになりました。

この研修は、センターの前身機関での実施を含め昭和47年度から昭和61年度まで開講されていた長期の研修(図書館情報学セミナー、文献情報センターセミナー等)を再開したものです。実施形態としては、中堅職員の研究の場として少数人数を対象とし、受講生が各自課題を自由に選択し、一定期間職場を離れて研究課題を遂行するという以前の研修の形をそのまま踏襲している様です。相違点としては、受講対象者に図書館職員以外に大型計算機センター等情報処理関連機関に勤務する

者を加えたこと、カリキュラムの大きな部分を占めるWS(ワークステーション)実習が目をはきまします。

再開第1回の7年度は、11月6日～12月22日、1月8日～3月15日の前後期を合わせて17週間の日程で実施されました。カリキュラムは、前期は1週間に2～3コマの教官による一般講義と主にWS実習で構成され、後期は全て個別研究に割り当てられていました。受講生は北海道・京都・鹿児島 of 各大学附属図書館から参加することとなった男性2名女性1名の計3名です。話してみれば同じような不安を抱えた年齢も環境も似通った3人であり、宿舍も同じということで長い研修を共に過ごすにあたり、何となくほっとしました。

研修期間を過ごす部屋として与えられた「セミナー員室」は研修課長室のすぐ隣にあり、大学の研究室程度の広さで、両壁際には机とロッカーが2組と1組に分かれて配置され

ていました。各自の机の上にはそれぞれX端末が1台ずつセットされていました。

初日のオリエンテーション後、早速選択課題について指導教官との簡単な打合わせの機会があり、初めて指導の宮澤先生と直接お話をすることになりました。そこで研究課題を進めていくにあたって「道具」の必要性を指摘されました。「道具」即ち「プログラム言語」、それが見るのも聞くのも初めての「Perl」でした。こうして研修開始早々「前期の内にPerlでプログラムを書くこと」という新たな課題が出されてしまい、前途多難の感を強くしました。

翌日からは一般講義と並行してWS実習が始まりました。講義は図書館をとりまく環境の急激な変化に関連した刺激的な内容のものが多く、最新の研究動向に触れることができた様に思います。たった3人の受講生を前に先生方が講義して下さるといふ勿体無いような環境でした。聴講後は各講義に関連して課題が与えられ、レポート作成が義務づけられています。また一週間ごとに週間報告の提出もあり、これらは全てWSで作成することになっています。こうして前期は殆ど講義レポートの作成でWS実習の時間が過ぎてしまい、課題研究も進まぬままWS実習というよりはエディタの実習に時間を割いていた様な気がします。悩みの種のPerlについては、入門書をお借りして主に宿舎で読み、センターでプログラムを実行するという形で何とか進めました。今振り返ってみても、この前期、特に最初の1～2週間程が最も辛い時期でした。

後期に入ると課題研究が中心となり、俄然忙しく且つおもしろくなりました。半分過ぎたという安心感もありましたが、やはり何物にも拘束されず時間を自由に使える、という状況は願ってもそう得られるものではありません。この頃には期間が残り少なくなるのを惜しむような気持ちで毎日を過ごすようになりました。ただ、課題研究が後期のこの2ヶ月に集中してしまった為に時間がとても足りず、3名共研修最終日の最後の瞬間まで端末に向かう者ありプリンタに走る者ありで、5ヶ月間を共にした別れを惜しむ時間もゆっくりとれなかったのが残念でした。

終わってみれば5ヶ月もあっという間で、一生に二度とない本当に贅沢な時間を過ごさせて戴いたという気がします。心残りを言えば、長期間東京に滞在していたわりには殆どの時

間を「セミナー員室」で過ごしてしまい、地の利を生かせきれなかったところでしょうか。これは研修内容がWSなしには殆ど成り立たない為、ある程度仕方ないことなのかも知れません。

生活面に関して最も気がかりだったのは、やはり健康管理でした。衣・食はともかく「住」についてはセンターに宿泊施設が無い為苦労しましたが、数年後には立派な施設も出来ると聞いています。研修の性格上、図書館員となって10年前後の方が対象になると思いますが、自己再教育の場として貴重な経験になることでしょう。

最後になりましたが、ご指導戴いたセンターの先生方、色々とお世話を戴いた研修課の皆様、課題に関してご協力戴いた全国の図書館職員の皆様、そして何よりも長期の研修に参加する機会を快く与えて下さった附属図書館の皆様にあらためて感謝の意を表します。

《研究課題について》

【課題】「目録システムと外字管理」

【概要】NACSIS-CATでそのまま入力することのできない外字・いわゆる「◆◆外字」について現在の入力状況を漢字を中心に調査した。また目録システム用文字セットとしてJISX0221-1995を導入した場合の影響を調査、さらには目録システムにおける外字管理について考察を行った。

【付表】「検出外字と大漢和・広漢和・JISX0221・JISX0208・JISX0212との対応・出現回数表」「JISX0221にない漢字一覧」「出版年代別・言語別書誌件数における外字を含む書誌件数の推移」等

*上記レポートは『平成7年度 学術情報センター・セミナー研究レポート』（1996年3月刊行）に収録。

